

今年も「UTAU DAIKU in ウィーン」に出演
ウィーン国立歌劇場専属歌手時代を思い返して

バリトン 甲斐栄次郎



かいいいじろう
東京藝術大学卒業、同大学院修了。イタリアにおいて、ザンドナイ・コンクール3位、ティト・スキーパー・コンクール1位入賞。ニューヨークとボローニャでの研鑽を経て、2003年から10年間ウィーン国立歌劇場のソリスト歌手として契約。国内では、二期会「フィガロの結婚」フィガロ役、新国立劇場「蝶々夫人」シャープレス役等で出演。第九、ドイツ・レクイエム、フォーレのレクイエム等のソリストとしても活躍。著書「ライカで綴る古都ウィーン(アートデイス刊)」。東京藝術大学准教授。聖徳大学客員教授。日本声楽アカデミー会員。二期会会員

「UTAU DAIKU in ウィーン」
第一回から3回連続で出演されている甲斐栄次郎氏に、コンサートの翌日お話をうかがった。

——3回連続出演されている唯一のソリストですが、振り返ってみていかがですか？

5年前のあの日、朝テレビをつけて初めて地震のことを知ったのですが、リハーサルに行くと同僚が皆心配してくれたのを有り難く思い出します。同時に、ウィーンにいる身では何もできなかったのがもどかしかったので、こうしてチャリテイコンサートで自分なりに何かできるのは嬉しいです。年末に第九を演奏するという日本独自の習慣を、日本の文化として発信しつつ、「東日本大震災のことを忘れずにいる」ということが大切なのではないでしょうか。

このオーケストラは室内オケなので本来第九はレパートリー外ですが、回を重ねることに「心を感じる、温かい第九」となり、このように人

びとが被災者に想いを馳せながら集うということの意義を強く感じるようになりました。また個人的には、ウィーン国立歌劇場で10年間専属歌手として歌ってきた自分にとって、音楽の故郷であるこのウィーンに3回目もまた戻って来られて、とても嬉しく思います。

——それはどのような10年間でしたか？

小さな役から始めていた1年目に、「シモン・ボッカネグラ」のバオロをカヴァーしていたのですが、2003年12月、5回目の公演前日に代役を言い渡されました。題名役はトーマス・ハンブソンでした。休憩時間に楽屋に来たホルンダー総裁に絶賛され、その後はドミンゴのシモンとも共演しました。

2年目は一番大変な年でした。第一キャストとして舞台に乗ることが増えるからです。当劇場は年間約300公演をこなしているのですが、自分も平均すると毎週一度の割合で舞台に立ち、その合間に別の複数の役

の稽古もしているというスケジュールでした。そんな中で、頭で理解した役柄を何度か舞台で演じると、舞台上のある瞬間につながるという現象を体験しました。例えばボエームを歌っていて、袖に入った瞬間「あれ、今パリにいたよな？」と錯覚したりするのです。

そのほかには、「ロベルト・デヴェリュー」でノッティンガム侯爵として、エリザベス女王役のゲルベローヴァと共演したのも強烈な体験でした。この配役では、2008年ウィーン国立歌劇場日本ツアーの際、演奏会形式で東京文化会館でも歌いました。

2度目の来日公演では、子供のための魔笛のパバゲーノを任せられ、その時の体験が現在の教育者への道にもつながっています。今年も日本ツアーがありますが、今回はホスト国でできることを色々考えています。

——そのような10年間に幕を引いて、日本へ帰国を決めたきっかけは何だったのですか？

10年という丁度良い区切りだった

など様々な要素がありますが、大きな転機は、その「ロベルト・デヴェリュー」だったと思います。ある線を越えたというか、そこから飛び出たら、もしかしたら地面はないかもしれないような境地で、それでも飛び出してみたら着地できた、というような感覚で、一種の脱皮ができたような気がします。それで今度は、パバゲーノで子供たちに伝えられたようなことを、祖国の後進たちに伝えられたら、と思っています。

——教職と舞台の両立は大変だと思えますが、今シーズンの公演予定はどのようになっていますか？

今年は、ウィーンでもよく歌っていた「蝶々夫人」のシャープレスが、7月にジョン・ミョンファン指揮の演奏会形式で、2月には新国立劇場で、と続きます。そのほか、9月にはメンデルスゾーンのオラトリオ「エリアス」に初挑戦します。

取材中、ウィーン国立歌劇場御用達のレストランでメイエ総裁にばったり会い、信頼感が感じられる挨拶を交わす場面もあり、甲斐氏がウィーン国立歌劇場に貢献した10年間の蓄積を垣間見させてもらった。これからの日本音楽界を、世界のそれとリンクさせながら牽引してもらいたい。



©Wiener Staatsoper/Michael Poehn
2011年9月3日「シモン・ボッカネグラ」バオロ役。



2012年5月26日
「ロベルト・デヴェリュー」
ノッティンガム公爵役。